巻　頭　言

「ゆれる」

前川　美行

東洋英和女学院大学心理相談室は、1997 年 4 月に地域に開かれた心理相談室として開設され、当大学院の人間科学研究科臨床領域学生の研鑽の場としても大切な役割を担ってきた。そして心理相談室紀要も本巻で 13 巻目となった。

当相談室は、鳥居坂という急な坂を上ったところ、かつてのヴォーリズ建築を再現した校舎の地下 2 階にある。東京の都心部は意外と坂が多く、麻布界隈にも鳥居坂のほかに、暗闇坂、狸穴坂、仙台坂などそれぞれに趣のある名前がついている。目まぐるしく変わる東京都心であるが、建物の変化とは裏腹に地形は変わらず、上る・下るという体の動きと視界の変化として人々に親しまれてきたものである。坂を抜ける風、注ぐ光の角度、上る人の息遣いなど、独特の情緒がそこには感じられる。土地の勾配が町を作り、都心の一角に人々の生活が営まれていく。そんな土地に相談室は根付いている。

2007 年 5 月、織田尚生教授の突然のご逝去により、当相談室は大きくゆれた。いや、大学全体が大きくゆれた。今年度初めての事例論文を書き上げた修士 2 年の大学院生と私は、翌 2008 年にこの場所に加わった者である。大きなゆれをまだまだ生々しく感じられた、大学院生活のスタートであった。

学生たちは、初めて事例を担当し、ケースカンファレンスを経験しながら、事例に取り組む姿勢を身につけていく。そして修士 2 年の夏には担当している事例について論文を書くわけであるが、事例の中で何が起こっているのか、自分は何をやっているのかもよく見えていない状態から、客観的に捉え言葉にする作業を促される。ケースを担当することだけでなく、論文を書くというもう一つの作業によって、ゆれながらも多くのことを学んで行く。毎年、本紀要には初めてケースを担当し、ゆれながらも必死に学びとろうとしている学生たちの姿が現れている。彼らは、ゆれ、そして何を学ぶのであろうか。

＊

「ゆれる」（2006 年　西川美和監督・脚本）という映画がある。東京でプロのカメラマンとして成功している弟と、家業のガソリンスタンドを継いで頑固な父と田舎で暮らす兄。その二人を軸として、故郷のつり橋の上で起こった出来事をめぐって、弟の視点で物語は展開する。兄とつり橋を渡っていた女友達が橋から落ちて死んでしまったとき、弟は離れた場所から偶然橋の上で起こった何かを目撃する。弟は猛烈な勢いで橋に戻り、何食わぬ顔で兄のそばに近寄り、茫然自失となっている兄が何か話そうとすることを制止するかのように兄を抱きしめ、こう言う。**「大丈夫だよ、大丈夫だよ。」**…事故として終わらせようとした弟の思いは、兄の自首によって覆されるが、再び弟は弁護士を雇い、無実の兄を支え救うべく懸命に行動する。しかし、公判の場でゆれたのは、弟の心であった。公判が進むにつれて落ち着いていく兄の表情に比べて、弟は不信と疑惑でゆれていく。何を信じていけばよいのかがわからなくなったのだろう。

弟は、自分の見た光景に衝撃を受け、心をゆらされるまいと、必死になって不安を押さえ込み、ことを進めた。しかし、一つの答えのみを信じ込もうとすればするほど心はむしろゆれに耐えきれず、弟はついに足を踏みはずしてつり橋から落ちてしまう。彼の兄を支える行動は、自分の心の中の兄への疑惑、不安、不信をすべ

て打ち消したい思いからの行動であったのであろう。ゆれるまい、ゆれていない、大丈夫、大丈夫…。
自分の見たものや体験したことを受けとめきれずに、ゆれた心を「ゆれるまい、ゆれていない」と懸命に抑える。しかし、ゆれを抑えようとすればするほど、自分の見ているものさえ違うものに見えていってしまう。弟には次第に兄の姿が違って見えていったのであろう。そして自分の不安が、体験や現実の姿をゆがめて見せる可能性を考える余裕さえなくなり、心は激しくゆれる。
映画の最後には、弟はその自分の姿に気づく。その姿をはっきりと認識させたのは、母が残した映像が呼び覚ました兄の記憶であった。

「すべてが頼りなく、はかなく流れる中で、ただひとつ、危うくも確かに架かっていたか細い架け橋の板を、踏みはずしてしまったのは僕だったんだ。
今、僕の目にも明らかな風景だ。
腐った板がよみがえり、朽ちた欄干が持ちこたえることはあるだろうか。
あの橋は、まだ架かっているだろうか。」

弟は、兄との関係を修復すべく走り出す。この後、兄弟はどう行動するのか。その問いは見る者それぞれへの問いかけとして残る。

＊

「存在を揺るがされるというのは、うまくすればね、新しいことが開かれるということですから。で、下手をすれば破局を迎えてしまうと。」（河合,2006）

＊

心理療法の場で、私たちは同じような体験をしている。自分の感覚はとても頼りない。そんな私たちがクライエントの話を聴きながら、クライエントが語る感情、あるいは語り得ぬものに触れ、自分の中に生まれてくる動きを感じていく。クライエントが何を感じまいとしているのか、恐れているのかまでが自分の中で浮かんできて、心のゆれ自体を感じることもあろう。すると、セラピストもゆれる。クライエントが心理療法に来なければならないほど、つらく感じているようなゆれを自分も感じていながら、動じずにいられるとしたら、それはどのような心の持ち主であろうか。ゆれるまいとすればするほど、大きく足元はゆれるかもしれない。板を踏みはずしてしまうことのないよう、ゆれに逆らわず、橋を渡っていきたいものである。

2010 年 1 月の今も、ハイチで大地震が発生し、人々の心のゆれは遠く日本まで伝わってくる。重篤な外傷体験によって、日常性を打ち破られ、信頼を壊された人の心に受けた傷は大きい。しかし、心に傷のない人間はおそらくいないだろう。それと同様に、絶対安心な環境はなく、変化のない日常もありえない。信頼は壊れやすいものであり、だからこそ作っていくものなのだろう。心は臆病でゆらぎやすいのだ。

つり橋とは、人と人をつなぐ橋かもしれない。こんなにももろく、不安定にゆれる橋だ。自分の心がゆれることが怖く、ゆれているのは外側だと思う。ゆれに逆らえば心は反動してより大きくゆれ、容易に人は踏みはずす。

また、つり橋は自分の心の深奥部へとつながる橋かもしれない。そこを通ればゆれる。橋はゆれるからこそ、崩れないのだ。

ロープや板切れで作られたつり橋はもろい。しかし人が作り上げ、使い続けられているつり橋は同時に強くもある。そしてもろくて強いのは、命も同じである。だが命とは違い、心にはやり直しの可能性がある。どんなに壊れてしまった橋も、架け直せる可能性がある。そして心は、命が遺したものとつながり、次につないでいく。

2009 年秋には本学元教授でもあった霜山徳爾先生がご逝去された。霜山教授・織田教授によって命を吹き込まれた本学の臨床心理学の心は、教員スタッフに引き継がれ守られてきた。その学びの場で学生たちは心理療法に触れ、さまざ

まにゆれる。私も、ゆらすまいとするのではなく、ゆれを支えることが大切なことだと、この二年でその心を教えていただいたように思う。

＜引用作品・文献＞

河合隼雄（2006）：対話する生と死．大和書房．82.

西川美和　監督・脚本(2006)：ゆれる．

『ゆれる』製作委員会.